

「自由な意志」について



ゴールデンウイークにテレビを見てみると、NHKで「ヒューマニエンスQ (クエスト)」という織田裕二さん司会の番組がありました。

「自由な意志」がテーマで、私たちは「意志を持って自由に決断をしている」と信じて疑わないが、最新の脳科学では、「自由な意志」は脳がつくっている錯覚、幻想かもしれないといい、実験を行ってそれを証明していました。

実験の内容は、被験者の前でアルファベットの画像を出してもらい、ボタンを押してもらったものでした。

今までの脳科学者は約三秒前に自分で決断をしてボタンを押していると考えていました。しかし、実験では約0.5秒前に決断をしてボタンを押していました。

0.5秒では自分の意志で決定することができないので、無意識に脳が勝手に指令を出して決めていることとなります。歎異抄の第十三条に、「よきところのおこるも、宿善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のはからうゆえなり。」と書いてあります。

ここに唯円房は、宿善のもよおすゆえと悪業のはからうゆえと言われており、善悪は人の心(意志)によるもの

ではないと言われています。

私の中でこの脳科学の実験結果は、歎異抄第十三条のこの内容のことと重なりました。

また、無数の電気信号が飛び交う脳の神経細胞の活動は、意志が関与する前に勝手に動き出し、それによって後付けのように生まれるのが「意志」だと脳科学者は言います。

この内容から次のように私は考えました。阿弥陀仏は、意志が関与する前に動き出し、それによって後付けのように生まれるのが「二種深信(自己の素質や能力は劣っており、阿弥陀仏の本願でなければ出離(注)できないと深く信じることと、そのような者を救うのは阿弥陀仏だけであると深く信じること)」だと。合掌(注)迷いの世界、煩惱の束縛を離れること

(光本 浩昭 記)



諸行無常のお話

インドのある国の貧しい家に、ゴータミーという少女が住んでいました。年ごろになって結婚し、男の子を産みました。ところがこの男の子は、かわいい盛りに病気で亡くなってしまいました。

彼女は息子の死が信じられず、子供を抱いて「この子に薬をください」といって歩き回りました。人びとは、「死んだ子は生き返らないよ。あきらめなさい」とさとしましたが、彼女はどうしても聞き入れず、薬を求めて歩き続けたのです。

気の毒に思った賢者が、この女性を救えるのは釈尊のほかにはないと考えて、「奥さん。祇園精舎にブッダがいらっしゃる。

あの方ならあなたの願いを聞き届けてくれるでしょう」と教えました。

彼女はたいそう喜んで早速、祇園精舎に赴いて薬を求めると、釈尊はゴータミーに命じました。

「ゴータミーよ。よくぞ来た。町の端からはじめて一軒一軒廻り、一人も死者をだしたことの無い家から白芥子を

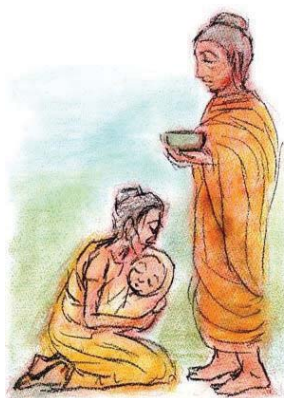
貰ってきなさい。その芥子で薬を作ってあげよう」
彼女は白芥子を乞い求めましたが、死者を出したことの無い家は一軒もありません。

歩き続けている内に、ゴータミーは生まれた者は必ず死ぬべき定めであることを自然に会得して、釈尊のもとへ帰ってきました。

「ゴータミーよ。白芥子は得られたか」
「尊者よ。すべてのものは移ろい行くことが理解できました。もう大丈夫です。どうぞわたしに教えを説いて下さい」

釈尊の法話を聞いてゴータミーは出家の決意をし、のちに最高の聖者の位に達しました。

『ジャータカ』角川ソフィア文庫



訃報のご案内

瀧口 洋之 様/令和4年1月10日に往生されました。
謹んで哀悼の意を表します。

編集後記(壮年会だより：令和4年6月「春夏号」会報)

「コロナ禍もどうやら落ち着いてきて、お寺の行事も平常に戻りつつあります。壮年会も今年は蓮如上人の『御文章』を学んでいくことになりました。テキストはお寺にありますので、多くの方のご参加を!!

壮年会だより

令和4年6月「春夏号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 33



「盗人にも三分の理」ということわざがあります。“悪事を働くにも相応の理屈がある。どんなことにも理屈はつけられるということ”と辞書には出ています。

今般のロシアのウクライナ侵攻、プーチン大統領は「特別軍事作戦」でナチズムの再興を阻止するためなどといっていますが、全く理屈に値しません。“盗人”にも劣ります。

お釈迦様は絶対平和を示されました。4月のお寺の掲示板「殺してはならぬ殺さしめてはならぬ」(『ブッダのことば』)であり、住職のご教示「兵戈無用」(『無量寿経』)です。1日も早い平和を、ロシア軍の撤兵を願わずにはられません。

【住・職・閑・話】



今年「日本のゴッホ」と呼ばれ、「裸の大将」のモデルで知られる、画家の山下清さんの生誕100周年にあたる年だそうです。

山下さんは3歳のころに重い病が原因で軽い言語障害と知的障害の後遺症を患いました。

12歳の時に「踏むな、育てよ、水そそげ」を理念とする八幡学園(千葉県市川市)において、ちぎり絵に出会い、その才能をいかんなく発揮しました。類まれな観察眼と高い集中度によって描かれた作品は、驚く程緻密で豊かな色彩に溢れ、見るものに感動を与えます。

山下さんの作品の多くは風景画ですが、その中でも花火を題材としたものが多く、山下さん自身、毎年各地の花火大会に出かけるのを楽しみにしていたそうです。

そして夜空に浮かぶ色鮮やかな花火を前に、「みんなが爆弾なんかつくらないで、きれいな花火ばかりつくっていたら、きっと戦争なんて起きなかったんだ」との言葉を残しています。

ドラマや映画になった「裸の大将」では、放浪先で出会う人々のいまいち噛み合わないやりとりや、心あたたまる交流が記憶に残っていますが、もともと放浪を始めたきっかけは、「徴兵を逃れたい」という理由でした。

争いを厭い、自らの心に正直に、世間や他者の眼を気にすることなく、生きておられたのでしょうか。

平和を願い、同じ火薬を使うなら、人の命を奪うためではなく、共に楽しみを為に用いた方がよいと、一見当たり前で明快な理論ではあるが、花火を前にただ幻想世界に浸りきっていたわけではなく、悲しい現実も見据えていたからこそその言葉だったのではないのでしょうか。

山下さんの心からの言葉を私たちはどのように受け止めていくのだろうか。

日本は平和な国だとか、平和ボケしているなどといわれますが、世界では今まさに戦禍に苦しみ脅えている人がおり、国内を見ても、いじめ、人権侵害・貧困に苦しむ人が

数多くいます。

自分とは関係ない、そのことは対岸の火事だと、自分と切り離して、自分と自分のまわりだけが平和ということが、真の平和とよべるでしょうか。

この身も、この心も、縁によって成り立ち、縁によって変わるといわなければならない。

網の目が、互いにつながりあって網をつくっているように、すべてのものは、つながりあってできている。

一つの網の目が、それだけで網の目であると考えれば、大きな誤りである。『勝鬘経』

「社会が悪い」「時代が悪い」「家庭が悪い」と、人間は自分に都合の悪いことは、その責任を他に転嫁する習性がありますが、社会・時代・家庭を構成する私という視点を忘れてはなりません。

私たちの無智と煩悩の悩みが、この世を生み出し、この世の濁りが私に影響を与えているのです。つまり、現実に巻き込まれている私が巻き込んでいる現実といえるのです。

